十七

あえのこと

「能登の神様は、素朴な生活の中に生きています。冬の訪れを聞く頃になると、奥能登では、一年の収穫を感謝し、夫婦の神様を家に迎えて手厚くもてなします。『あえのこと』は、今も生活の一部として伝えられています。さて、今年のごちそうは何でしょう。」

かいせつ

能登は祭の国・信仰の国です。さまざまな祭礼や宗教行事が各地に息づく中でも異彩を放っているのが、能登北部の珠洲市、輪島市、鳳至郡に伝わる「あえのこと」です。あえのことの「あえ」とは饗応（酒食事でもてなす）、「こと」は祭事を意味する収穫祭の一種です。毎年12月5日になると、農家の主人が苗代田に出かけて、田の神を座敷に迎え入れ、甘酒をすすめます。それから風呂に案内し、ご馳走の膳をすすめながら目に見えない神様をまるで実在するかのように接待します。膳にのせたご馳走は2人前で、必ず二股大根とオザシ（焼き魚）、大きな箸が用意されます。田の神は稲穂で目を突き目が不自由とされており、主人はご馳走の内容を大声で説明します。その後、神様はその家に滞在し、2月9日に再び雑煮餅で接待され戸口まで送り出されます。目に見えない神様に家人が語りかける様はどこかユーモラスで、古来より伝わる稲作社会の基盤をかいまみることができます。

※本CDの「あえのこと」は珠洲市にて収録したものです。